

# 近代日本文学における ロマン主義的イロニーの射程

文・尾西康充  
Onishi, Yasumitsu



## 青年三島由紀夫と 詩人伊藤静雄

一九四五(昭和二十)年二月、三島由紀夫は召集令状を受ける。「御父上様、御母上様」で始まり「天皇陛下万歳」で終わる型どおりの遺書を認めて、入隊検査に臨んだ。当時、彼は東京帝国大学法学部法律学科在学中の二十歳の青年である。すでに小説「花ざかりの盛り」を京都七丈書院より上梓していた。しかし、気管支炎による高熱を肺結核と軍医に誤診されて、即日帰郷を命じられる。その帰途、敬愛する詩人伊藤静雄を大阪に訪ねた。

伊藤は大阪府立阿倍野高校に勤務しながら、「コギト」「文芸文化」「四季」などの文芸誌を通じて活躍する詩人であった。「超国家主義」を標榜する文芸誌「日本浪漫派」同人の時期もあり、『浪漫的自我の問題』の亀井勝一郎や『反進歩主義文学論』の保田與重郎らとも誌面を分け合っている。「自然は限りなく美しく永久に住民は貧窮してゐた」(「わがひとに与ふる哀歌」という伊藤の詩を、萩原朔太郎は「傷ついた浪漫派の詩」、「歪められた島崎藤村」と評している。

生涯でただ一度きりとなった伊藤との対面直後の四月、三島は「もはやイロニーはやめよ」と題する詩を回覧雑誌「MANDARA」(林富士馬主宰、

第四号)に投稿している。

もはやイロニーはやめよ  
イロニーはうるさい  
巷には罹災者のむれ  
大学は休講つゞき  
大学生はやたらに煙草を吹かす  
湊の霧のなかで数しれぬ帆柱に  
またたく  
檣燈のやうに  
来ぬ教授を待ちながら  
大学生は煙草を吹かす  
もはやイロニーはやめよ  
もはやイロニーは要らぬ  
急げ今こそ汝の形成を  
汝の深部に於てより  
汝の浅部に於て  
ああ汝の末端に  
急げ今こそ汝の形成を

## 新たな三島のイロニー

ところが、その自己形成が「浅部」や「末端」で行われるとする点に、新たな三島のイロニーが生じる。そこには、徴兵検査の失格により、歴史の流れから脱落し本質から疎外されたという意識が働いている。それ以後の、華麗な文体が用いられた三島の文学は「浅部」や「末端」での自我の仮象の戯れであり、その限りでの、もう一つの歴史世界を芸術の上に仮構する試みであったといえよう。

だが、それが仮象の域を踏み越え、自我の実体化による政治参与、そして、現実に行使する暴力に向かった瞬間に破局を迎える。それが本来、イロニーの運動体であったことを忘却したがゆえに。

## ロマン主義的イロニーと 三島の悲劇

十八世紀末からドイツを中心として始まったロマン主義は、人類に理性が普遍的に備わること前提とした啓蒙主義が合理的な知の認識体系を作り上げたのに反抗して、人間の内なる自然の非合理的な本性に着目した。共通の規範というものは存在せず、何かあるものを理解するためには、その自然様

態において、すなわち、あるがままの個性やそのもの固有の生活条件のなかに「感情移入(Einfühlung)」「ヘルダー」する能力が不可欠であるとす。そのような考えに従って、ロマン主義は、個人―民族―国家の心象上の有機体的つながりのなかに、民族国家固有の諸文化を統合することを試みるのである。

その統合化の試みは、近代ナショナリズムにおいて、大地・血・共同体の三つの契機により実行された。今日の社会でも、統合化がキーワードになっている風潮があるが、それは幻想を育むだけで内実は乏しい場合が多く、切り捨てられる部分の大きさに嘆くか、もしくは憂鬱な自我の肥大化に終わることが多い。

非―自我である外界の一切を、自我によって措定された産物とし、自我のなかに包摂して行く精神の運動をロマン主義的「反省(Reflexion)」と呼ぶ。措定―同一化―自己否定を無限に繰り返す反省活動は、その認識の直接性と無限性によって、精神の絶対的自由を手中にする。だが、その事態を裏返してみれば、それは自我の意識の無限の彷徨に過ぎない。「イロニー的観察(tironisch Beobachtung)」は「対象のなかに発芽する自己認識だけを注視している。あるいはむしろ観察とは発芽する対象意識そのものである」(ベンヤミン)。このような反語的現象が、ロマン主義的イロニーなのである。

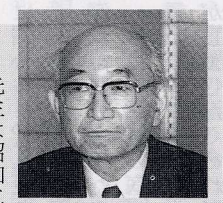
みるならば、ドイツ浪漫主義がフアンジズムを準備したように、ロマン主義的イロニーは急転直下、支配的権力による言説の手先になる。暴力行使を讃える頌歌になるであろう。暴力によって自らの命を絶つた三島の悲劇も、その傾向を持っていた。

ある面において、内なる自然の解放を目指すロマン主義には、テクノロジ―など合理主義一辺倒の現代文明に異を唱える魅力が満ち溢れている。生き生きとしたその魅力が失われないうために、どのようになればよいだろうか。

イロニーは本来、反語的表現を用いた諷刺・諧謔である。ロマン主義的イロニーの救出法はただ一つ、その批判的な強度がより高められなければならないのである。そして、極限にまで高められたその強度の内こそ、芸術表現の真の自律性が秘められているのではないか。

## プロフィール

- ◆一九六七(昭和四二)年一月 兵庫県神戸市で生まれる
- ◆一九九〇(平成二)年三月 広島大学教育学部日本語教育学科卒業
- ◆一九九二(平成四)年三月 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士課程前期修了
- ◆一九九五(平成七)年三月 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士課程後期修了、博士(学術)取得
- ◆同年四月 広島大学教育学部日本語教育学科助手



## 名誉教授 伊藤啓二先生を悼む

伊藤啓二先生は平成八年一月十一日午後、ご入院先の中国共済病院で逝去されました。享年六十八歳。昨年春、身体の不調を訴えられ、入院療養中のことでした。

先生は昭和二十五年に東京大学農学部水産学科を卒業後、母校の助手、厚生省国立栄養研究所を経て、昭和三十年に広島大学水産学部講師として赴任され、昭和三十九年助教授、五十二年には教授に昇任され、平成三年停年によりご退官されました。広島大学において三十六年間の長きにわたり、水産化学、水産物利用学の講義を担当され、また水産化学全般に関する研究に従事され、独創的成果を挙げるとともに、豊かな学識と温かなお人柄をもって、学生の教育に献身され、多数の優れた研究者、実業家、社会人を育成されました。

この間、大学改革委員等各種委員、広島大学評議員、生物生産学部長、生物圏科学研究科長を歴任され、大学紛争及び統合移転等の広島大学の激動期に、大学の管理・運営に重要な役割を果たし、また水産産学部から生物生産学部への改組、大学院生物圏科学研究科の設立及び学部の福山から東広島への移転の実施に尽力されました。

先生は水産化学のなかでも、主として海藻類の生化学と利用に関する研究に取り組み、紅藻オキツノリから自然界に知られていなかったグアニルウレイド構造をもつ新アミノ酸、ギガルチニン等を単離し、海藻が新物質の宝庫であることを示されました。その後、発展的に海藻の酵素及び生理活性物質の研究を遂行され、資源量が多いにもかかわらず海苔等一部を除いては未利用資源に留まっていた海藻類の生化学資源としての有効利用・開発に新たな展望を開かれました。

先生は評議員、学部長としてお忙しい時でも、自ら試験管をとって実験に取り組み、研究に対する厳しい姿勢を身をもって示され、また温かいお人柄から学生の信頼と敬愛を集められました。囲碁等ご趣味も広く、試料採集を兼ねた旅行もお好きで、退官後は車の免許を取得され、ドライブを楽しんでおられました。今、ここに永久のお別れをすることは耐え難いことですが、ご指導に心から感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

生物生産学部食品科学講座 宮澤啓輔(みやざわ けいすけ)

## 追悼